

## 明治初期日本における医療情報の移入と伝達

—西南戦争と皮下注射法の普及—

月澤美代子

順天堂大学医学部医史学研究室

皮下注射法は、1850年代のイギリスで開始され、1860–70年代にフランス、ドイツ、アメリカを中心に成長しつつ普及していった医療技術である。論者は既に別報で、欧米において医療情報誌を舞台とした臨床医たちの集団的な臨床治験の積みかさねにより、皮下注射法が実用的な治療技術として開発・定着していった経緯を示した。一方、日本において、皮下注射法は既に1860年代末には伝えられていたが、その情報の質と量において欧米とは大きな差があり、1875（明治8）年までに文字情報として日本語で利用できたものは欧米の概説書の抄訳にすぎなかった。

しかし、皮下注射法は、導入後、速やかに日本の医療現場に浸透していった。日本の臨床現場における皮下注射法の普及に大きな意味をもったのは、1868（慶應4）年からイギリス人医師ニュートン（George Bruce Newton: 1837–1871）が横浜で開いた病院で、遊郭の女性に対する梅毒治療のために実践された昇汞の皮下注射、および、西南戦争における傷病兵へのモルヒネを中心とした多様な薬剤の皮下注射であった。

1877（明治10）年の西南戦争が、佐藤進ら欧米への留学経験のある医師の参加により外科技法の普及・伝達に大きな意味をもったことは、これまでしばしば論じられてきた。しかし、皮下注射法などの内科領域においても同様の状況が展開されたことについては、これまで十分に論じられてこなかった。本発表では、日本における皮下注射法の導入と普及について、1877（明治10）年西南戦争における大阪陸軍臨時病院における治験症例を中心に、その歴史的経緯を跡付け、医療技術の導入・普及と医療技術評価の観点から分析を行っていきたい。

西南戦争は、2月～9月まで、8ヶ月の長きに渡って戦闘の続いた国内戦争であった。当初、久留米に軍団病院を、高瀬その他に軍団支病院を置いていたが、戦闘の進展に伴って大阪の鎮台病院へと患者を移送するようになった。大阪陸軍臨時病院への正式な名称変更と移送の決定は4月1日からだが、既に3月から負傷者が送られてきていた。石黒忠恵が編纂した『大阪陸軍臨時病院報告摘要』によれば、閉院までの10ヶ月間、この病院で治療を受けた者総計凡8,569人（負傷者5,990名、内科患者2,599名）、腸室扶斯（腸チフス）は161名、亜細亜虎烈刺（アジアコレラ）は887名を数えた。しかし、臨時病院に収容された患者のほとんどは外傷を負っており、内科疾患を併発していた。当時、「内科随一」とされていた順天堂出身の佐々木東洋は、6月に来阪して臨時病院で内科を担当していたが、9月初旬、コレラ患者の発生に伴い、その主任醫官に任命された。10月はじめには『虎烈刺略論』と題する小冊子を刊行して院内に配布したが、これには、欧米の医学書の単なる纂訳ではなく、佐々木自身が実践した臨床上の体験に基づく技術評価が含まれている。コレラ治療にあたって、佐々木はモルヒネの皮下注射を重用したが、佐々木が、この西南戦争時に記したコレラ患者のカルテが順天堂大学所蔵山崎文庫に残されている。このカルテと『虎烈刺略論』、さらには、『大阪陸軍臨時病院報告摘要』、『軍團病院日記抄』における記述を対照させながら、大阪陸軍臨時病院におけるモルヒネ皮下注射の使用とその技術評価について分析し報告する。